



Japan Mobility Show 2025 出展ストーリー

実施委員リーダー

佐藤 洋輝 ・ 栗原 健太

1 はじめに

約70年続いてきた「東京モーターショー」から、一昨年新たな姿へと生まれ変わった「Japan Mobility Show (以下JMS)」。それから3度目となるJapan Mobility Show 2025 (以下JMS2025) が、2025年10月29日から12日間、東京ビッグサイトで開催された (写真1)。

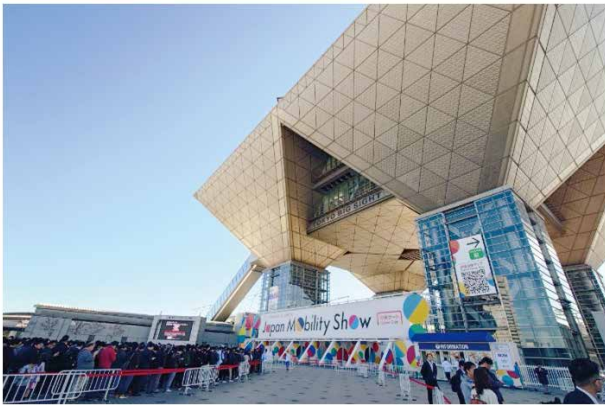


写真1 JMS2025@東京ビッグサイト

1.1 JMSとは

東京モーターショーは、完成車発表を中心としたイベントの印象が強かった。一方JMSは、“モビリティ”全体を対象とするイベントであり、ドローンやロボット、航空機なども含まれ、日本の未来を、多様な仲間と共に創り上げることを目的とした場である。また、JMSは「ショーケースイベント (モビリティの未来を感じる場)」と「ビジネスイベント (未来を創る企業連携を促進する場)」を毎年交互に開催し、2年間で1つのパッケージで構成され、2025年はショーケースイベントに当たる。

前回のショーケースイベントであるJMS2023では、全体コンセプトとして「乗りたい未来を、探しに行こう!」を掲げ、FUTURE, GREEN, DREAM, 3つの切り口で、自動車業界の枠を超えて、他産業

やスタートアップ、計475企業・団体が参加した。更に、日本自動車工業会が目標としていた100万人を上回る111万2000人が来場し、大盛況のうちに幕を閉じた。

1.2 JMS2025

JMS2025は、「ワクワクする未来を、探しに行こう!」を全体コンセプトに、FUTURE, CULTURE, CREATION, 3つの切り口を掲げ、自動車業界の枠を超えて計522の企業・団体が参加した。「みんながワクワクし、一緒に考え、未来を創り上げていく」という主催者の想いが込められた今回も、101万人が来場し大盛況となった。ショーケースイベントとしては2回連続の100万人超えを達成し、JMSに生まれ変わったことによる継続した活気が示された (写真2)。



写真2 JMS2025入場待機列

2 JMSとなって2度目の出展

カヤバはJMS2023に、2017年以来の久しぶりとなる出展を行い、当時はすべてが手探りの状況から準備を進めた。東京モーターショーからJMSへと生まれ変わり、ショーとしての方向性が変わったことも相まって、二重のプレッシャーがのしかかっていた。

そこで、クルマに固執せず、カヤバの強みである油圧技術を老若男女問わず知っていただきたいという想いをブースに込めた。ショックアブソーバだけではなく様々なカヤバの技術を、「カヤバのアソビバ」というコンセプトを掲げて体感できる展示とした。

その結果、狙い通りお子様からご年配の方まで幅広い来場者に楽しんでいただき、大成功を取めることができた。JMS2023カヤバブースの様子を写真3に示し、特設サイトのQRコードを図1に示す。



写真3 JMS2023 カヤバのアソビバ (左)

図1 JMS2023カヤバ特設サイトQRコード (右)

今回は、JMSとなって2度目の出展である。前回の出展にて全力を注いだがゆえに、「前回の方が良かった」、「今回のカヤバブースはつまらない」という声が出るのではないかと不安が真っ先に頭をよぎった。前回との比較を避けられない立場だったが、出展委員長と実施委員リーダーの初回三者面談で「絶対に前回は超える良い出展にしよう」と誓い合ったことを今でも鮮明に覚えている。

JMS2023実施委員は20名だったが、JMS2025では前回経験者4名を含む24名で発足した。リーダーである私たち2名も経験者である。なお、前回同様、メンバーは主に若手技術者で構成され、普段は製品設計や評価などを担う者が大半である。

前はすべてが手探りだったことに加え、日程も非常にタイトで苦しいものだった。今回の実施委員が始動できたのは2025年3月13日であり、前回同様に会期まで短い日程感だったが、「経験を活かし、苦しい準備期間にはしない」という強い想いを胸にスタートを切った。

3 上々な立ち上がり

カヤバがJMSに出展する主目的は、カヤバが持つ将来のモビリティに生きる技術の価値掲出、カヤバの認知度・好感度向上である。

この目的を達成するためには、コンセプトを核とし、それを体現する展示物やイベント、各種コンテンツを緻密に設計する必要がある。更に、それらの効果を最大限発揮するためのブース構成や運営準備、出展の成果を測るアンケート、そして前回は力を入れられなかった「ブースに足を運ばない方々への施策」まで、検討すべき項目は始動直後から次々と頭に浮かんだ。加えて、前回出展の課題を確実にフィードバックするべく、課題資料の読み込みと、前回リーダーへのヒアリングを重ね、要点を整理した。同時に、実施委員同士が意見を交わしやすい環境の重要性を前回の活動で実感していたため、今回はより一層、全員が気軽に発言できる雰囲気づくりにも強く意識した。

また、前回のカヤバブースを全面的にプロデュースいただいた株式会社クオラス様（広告代理店。以下クオラス 敬称略）に、今回も協力を依頼した。

3.1 コンセプト検討

3月13日の始動と同時に、最初の重要課題であるコンセプト検討を開始した。まずはJMS2025の全体コンセプトや3つの切り口、FUTURE、CULTURE、CREATION、を深く理解し、ショー全体の趣旨を把握することから始めた。ここを起点に、過去、現在、未来でモビリティとは人々にとってどのような存在か、カヤバとしては何を見せるべきか、前回の来場者アンケート結果を踏まえた出展の方向性、2025年はカヤバ創立90周年であることをどのように織り込むか、などを整理した。前回の大成功を経験しているからこそ、何を踏襲し、何を变えるべきか悩み抜いた。実施委員全員の考えを集約し、4月下旬にはカヤバの出展キーワードに落とし込むことができた。

モビリティとは、ツールでもあり生きがいにもなり得る存在で、人々と切っても切れない暮らしに寄り添うものである。カヤバが持つ技術もまた、人々の暮らしに寄り添うものである。縁の下の力持ちとして社会のあらゆるところで活きている。これらを直接的に表現し、「これからも暮らしに寄り添う」というキーワードを実施委員で導き出した。更に、創立90周年で培った技術を、老若男女問わず楽しく知っていただきたいという方向性も明確になった。コンセプト検討の流れを図2に示す。



図2 コンセプト検討

ここから先は、出展キーワードをキャッチーかつ来場者に興味を持ってもらえるコンセプトコピー・ロゴにすべく、クオラスにも検討いただいた。普段目に見えるところにも、見えないところにも、カヤバの技術が活かしている。このことを、フックのある言葉で単的に表現し、「カヤバのしわざ 見えないところにも、カヤバの技が活かしている。」をコンセプトとして出展していくことに決定した（図3）。



図3 出展コンセプトロゴ

3.2 ALLカヤバ

出展キーワードは今回の出展の核として揺るがないことを確認した後、コンセプトコピー・ロゴ検討と並行して展示物の検討にも着手した。お子様やカヤバを知らない一般の方も多く来場されることを念頭に、何に関わりのある会社なのか理解いただくため、モビリティが目に入るブースを考えた。また、前回アンケート結果を基に、より楽しく、深く、カヤバの技術を知っていただくため、体感展示をパワーアップさせることを前提とした。

また、実施委員の認識として、カヤバの強みは“多種多様なモビリティに技術・製品を提供している”ことである。どのモビリティもカヤバにとって大切なものであると考え、モビリティに優先順位を付けてどれかに絞ることはしなかった。

展示の方向性として行き着いた結論は、自動車の他、バギー（趣味のモビリティ代表）、パワーショベル・コンクリートミキサ車（働くクルマ代表）、鉄道、をモビリティとして分かる形で展示しつつ、ALLカヤバの技術を体感できるブースである。

一方で、この体感型ブースを実現するためには、現状の実施委員だけでは知見が不足していることも認識していた。

4 溢れる想い

ブースに盛り込む想いは、準備を進めるほどに更に膨らみ、形にしたいアイデアが次々と湧き上がっていった。

4.1 展示物構成

展示物を具体化するために、カヤバの強みである“多種多様なモビリティに技術・製品を提供している”を深掘りした。カヤバは創立当時からコア技術として振動制御技術、パワー制御技術を持っている。時代の変遷に沿って、それらを高次元に使いこなすためのセンシング・制御技術に磨きをかけてきた。カヤバの技術を掲出するに当たり、これら3つのコア技術を来場者に“感じてもらう”仕掛けをブース全体に織り込むことが必須だと考えた。

振動制御技術としては自動車用ショックアブソーバ、鉄道用の左右動ダンパが該当し、パワー制御技術としては、パワーステアリング、アクチュエータやポンプなどの油圧機器、コンクリートミキサ車が該当する。センシング・制御技術はそれらすべての高次元化に寄与するコア技術である。

来場者に分かりやすく伝えるため、ブース内は「振動制御ゾーン」「パワー制御ゾーン」「センシング・制御ゾーン」に分けた。更に、それらコア技術を融合し提案する「未来のモビリティゾーン」を設けることにした。

振動制御ゾーンでは、ショックアブソーバの乗り心地改善効果や鉄道左右動ダンパの働きを体感できる装置を設置し、環境対応として開発中のサステナブル（環境作動油）の動展示を行う構想とした。

パワー制御ゾーンでは、油圧の仕組みを理解できるパワーショベル型モックアップや、注射器ショベルによる体感展示、透明化したドラムで構造を示すミキサ車展示、更にバギー車両でパワーステアリングの効果を体感できる展示を計画した。

センシング・制御ゾーンでは、体感技術が街中で活用されていることを示し、高度な制御技術の基礎を理解できるジオラマを考案した。

未来のモビリティゾーンでは、カヤバの技術が描く未来像を可動モックアップ車両で表現し、来場者が「ワクワクする未来」を体験できる空間を創り上げ、JMS2025のコンセプトに応えることを目指した。

最終的に、ブースは8つのエリアに分け、計11個の展示を行うことに決定した。これらの名称は、開幕直前まで議論を重ねた末にようやく確定したものである。以下に、8エリアを代表する展示物の名称と概略を示す。また、ブースレイアウトイメージを

図4に示す。

- ①サステナブル×モータースポーツ
加振機上に乗せた車両模型の揺れ方を通して、サステナブルと従来油の違いを体感する動展示と、実際にラリー選手に試乗していただいたインプレッション動画の放映。
- ②乗って体感！ショックアブソーバ
車内をイメージした空間で椅子に座りながら減衰力の大小を実際に体感できる装置（以後、SA体感機）。
- ③鉄道にも！？カヤバのしわざを感じよう！
鉄道形の体感機で、実は鉄道でも活躍している左右動ダンパの役割を体感できる（以後、鉄道体感機）。
- ④見る！考える！カヤバのしわざ
ブース中央にカヤバの製品が搭載されたモビリティを配置したジオラマを展示。振動を検知して光るミニ四駆を走らせ、センシングの様子や、そのデータの活用方法を紹介。
- ⑤ミキサでポン！
コンクリートミキサ車の仕組みを学びながらカヤバグッズを配布。
- ⑥ショベルを動かすカヤバのしわざ
パワーショベルのモックアップを通してカヤバの実製品と動きのしづみを体感できる展示。動画や注射器ショベルもあり、お子様でも分かりやすく紹介。
- ⑦“曲がる”をアシスト！カヤバのしわざ
ATVに乗ってハンドルを操作し、EPSによるアシスト効果を体感できる展示。
- ⑧暮らしに寄り添う
コンセプトモビリティ『MOYORI』
フルアクティブサスペンションによる車体の下降・上昇や、四輪独立操舵アクチュエータによる前輪と後輪で独立した転舵のうれしさを紹介。更に、デモンストレーションも実施。



図4 ブースレイアウト最終版

4.2 ブース全体施策

JMS2023の経験を活かし、展示物以外でも来場者楽しんでいただくための施策を、ブース全体で考えた。代表して5つの施策を紹介する。

1つ目はスタンプラリーである。前述の体感展示は一見して繋がりがなく見えるが、実はカヤバのコア技術で繋がっている。そのため、スタンプラリーを通じて「コア技術で繋がっている」ことを感じられる工夫をした。また、スタンプラリー台紙にはカヤバの情報を集約し、広告を兼ねる工夫も施した。

2つ目はカヤバグッズである。スタンプラリーでは達成数に応じて、ミキサでポンではランダムでグッズ配布を行った。カヤバグッズ検討に当たり、JMS閉幕後にもカヤバを思い出してもらえよう、「記念品としてももらって嬉しいものや日常的に使えるものにしたい」というのが実施委員の当初からの総意だった。この想いに基づき、皆で意見を出し合った結果、元々カヤバで扱っていたグッズに加え、今回オリジナルのグッズを用意することにした。用意した計5種類のカヤバグッズを写真4に示す。



写真4 カヤバグッズ

3つ目はデモンストレーションである。ブースの目玉となるMOYORIを通して「ワクワクする未来」を感じていただくことまでは考えた。しかし、より多くの来場者に分かりやすく伝えるため、動きを見せるデモンストレーションを実施することにした。

4つ目はプレスブリーフィングである。JMS2025の性質上、具体的な製品PRは考えていなかった。一方で、創立90周年を迎えたカヤバの歩みと目指す未来を直接伝える場として、プレスブリーフィングにエントリーすることにした。

また、デモンストレーション、プレスブリーフィングを行うに当たり、カヤバの出展コンセプトを体現する動画、カヤバが考える未来を示す動画の製作も行うことにした。

5つ目は衣装である。ブースの世界観を一貫して演出するため、コンセプトロゴを基にクオラスで検討いただき、来場者の目を引く衣装でアテンドすることにした。

5 展示物製作

出展に向け、様々な部分に溢れる想いを盛り込み準備を進めた。そして、いよいよ最重要コンテンツである展示物の詳細検討に本格着手するフェーズを迎えた。

5.1 全チーム始動！！

展示物構成がおおむね固まったのは6月頃だった。ここから、前述の8エリア・11展示の詳細検討を進めるため、各実施委員の経歴や専門性を考慮し、リーダ判断で全員をチーム分けした。リーダは全チームの方向性を示しつつ、必要に応じてフォローに入れる柔軟な体制を構築した。さらに、各展示チームには、詳細検討を先導する役割としてチーム代表を任命した。

各展示チームは、リーダと共に、譲れないこだわりポイントを議論、抽出し、それらを実現すべく奮闘した。全ての展示物で数々のドラマが生まれたが、ここでは抜粋して2つ紹介する。

5.1.1 慣れないシミュレーション

SA体感機と鉄道体感機は、頭の中では今にも動き出しそうな構成に思えた。しかし、誰も類似品を製作したことがなく、頭の中にある動きを簡易的に再現して検証することすら難しく、やり直しの猶予もない日程であった。実際に体感できるかどうか全く分からない中で製作を進めるしかなかった。

一回の製作で成功を取める唯一の拠りどころは、シミュレーションソフトだった。SA体感機と鉄道体感機はどちらも動きは類似である。違いは、自由落下を振動のきっかけとするのがSA体感機、左右方向の強制加振と慣性を振動のきっかけとするのが鉄道体感機である。これら体感機の要となる、ショックアブソーバ／左右動ダンパの減衰力設定やばね乗数の最適化を短期間で実施した。来場者の体格や感じ方が千差万別であること、また、安全第一であることから、良い塩梅を見つけることは極めて難しかったが、シミュレーションを駆使し、部品要件に落とし込むことができた。

鉄道体感機については、左右動を実現するためのアクチュエータ選定にも苦戦していた。装置自体の再検討を行う余裕もない中、装置としての要件はもちろん、コストと日程も非常に厳しい制約があり、普段使い慣れていない社外品を使うこと自体がリスクだった。そんな中、カヤバの製品であるEPS (Electric Power Steering の略) もアクチュエータとして使えるのではないかと意見が挙がった。要件を満足し、取り付

け確認もスムーズで、何より社内に有識者が十分に在籍していることが心強かった。EPSは小型で推力もあり、アクチュエータとしても非常に優秀であることを改めて実感した。

SA体感機の初期構想を図5、鉄道体感機の初期構想を図6に示す。

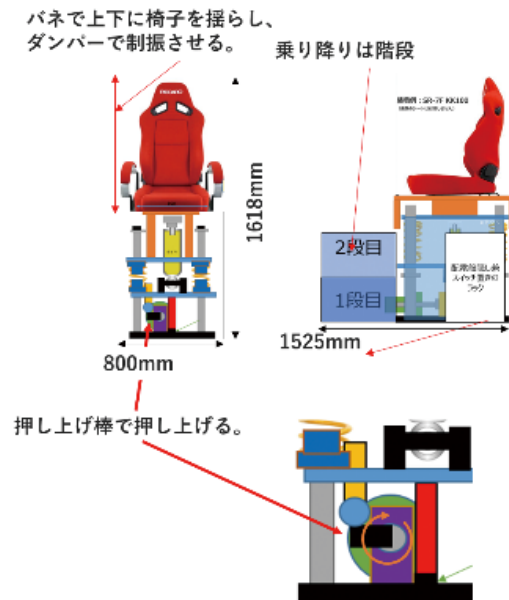


図5 SA体感機初期構想

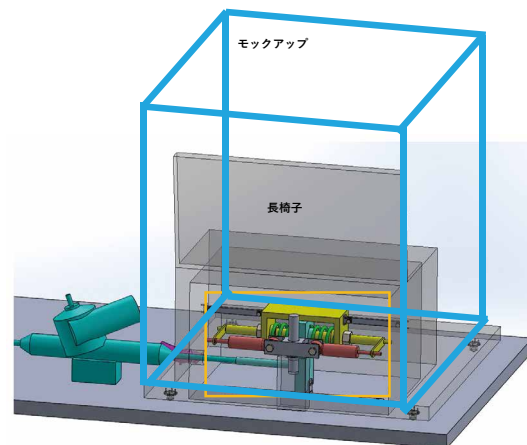


図6 鉄道体感機初期構想

5.1.2 モビリティのモックアップを作る

カヤバは自動車メーカーではないため、現時点でモビリティを販売するという事は考えていない。しかし、来場者にモビリティショーとして「ワクワクする未来」を感じていただくためには、技術単体ではなくモビリティを通して“コト”を伝えるべきという結論に至った。こうして、未来のモビリティに活かせるカヤバの技術を、モックアップへ搭載することに決定した。

更に、搭載技術によってモックアップが動くこと

で「その技術によって何が嬉しいのか？」を老若男女問わず実感いただきたいと考えた。非常に高い壁だったが、実際の動きをデモンストレーションすることに挑戦した。

最初の壁は、「未来のモビリティに活かせるカヤバの技術をどのように紹介すべきか」という展示コンセプトだった。議論を重ね、「全ての人が、気軽に、自由に、どこへでも行ける未来」を提示し、そのための技術を紹介する方針とした。乗降時は小さい段差の方が誰でも乗り降りしやすく、走行時の揺れは小さい方が快適で、駐車時や旋回時に小回りが利くと狭い場所にも進める。交通弱者と呼ばれる方はもちろん、あらゆる人にとって、シーンによらず快適な移動を提供したい。そのような想いを胸に、未来のモビリティに活かせるカヤバの技術として、フルアクティブサスペンションと、四輪独立操舵アクチュエータを織り込むこととした。また、来場者に嬉しさを実感いただくため、モビリティの動きを“魅せる”検討を重ねた。

次の壁は、モビリティのモックアップ製作の経験がないことだった。どのようにモックアップを動かすか、織り込む技術をどのように搭載するか、モビリティ自体のキャラクターや形状なども考えつつ、同時並行でモックアップ製作会社を探した。クオラスにも協力いただいたが、非常にタイトな日程のため、声掛けしても断られることが続いた。くまなく調査いただき、イメージするものを引き受けていただけのモックアップ製作会社に出会うことができた。首の皮一枚が繋がった状態で製作に移行できたのは8月末、会期まで残り2か月を切っていた。当時の実施委員がイメージしていた未来のモビリティ像を図7に示す。



図7 モックアップラフ構成

5.2 チーム再編

6月にさかのぼり、展示物構成が固まった段階で、現状の実施委員だけでは知見が不足していることを認識していた。ミキサ車、鉄道向け製品、パワーショ

ベル向け製品について、有識者の実施委員追加が必須と判断した。

各拠点・事業部へ、出展の方向性説明と協力依頼を出展委員長経由で行い、快諾を得て増員を取り付けることができた。実施委員は全員が本業を調整の上、兼務する形で活動している。各拠点・事業にとっては突然の依頼となったが、本業を調整しながら順次加入いただいた。全員が揃った8月上旬、岐阜地区に加え、相模工場、熊谷工場と、全事業にまたがるALLカヤバの実施委員、総勢28名体制が整った。

5.3 製作着手

展示チーム再編と社内有識者への度重なる相談を経て、溢れる想いが詰まった各展示の構成・構造検討から、部品手配に移行できた。当初の計画では7月末までに手配を終える想定だったが、約1か月遅れで進行。更に、MOYORIは8月末に製作会社様が決定し、会期まで残り2か月を切る中、1週間の猶予もないギリギリの日程で進めることになった。

6 ○○の秋♪

○○の秋と言えば何を思い浮かべるだろうか。読書、食欲、スポーツ…。楽しいことが多い印象の秋だが、私たちリーダにとって、今年“絶体絶命の秋”だった。9月に入っても、展示物、動画、デモンストレーションなどのイベント関係、ブース掲示物、平面図、運営マニュアル、カヤバグッズ、搬入出計画…。何一つ完成していない状況だった。こうならないために、実施委員発足当初からJMS2023の経験を活かし、前倒しで検討を進めてきたつもりだった。しかし、現実ほとんど毎日が何かしらの納期であり、息をつく間もない“JMSハイな秋”が始まった。感覚が麻痺し、とても楽しく日々追い込まれていた記憶がある。一方で、実施委員はどのような秋を過ごしたのだろうか…。大変恐縮である。

6.1 溢れすぎた想い

当初の計画では、バッファを持ちつつ9月中旬には全展示物、各展示に関わる動画、ブース掲示物をおおむね完成させ、残り期間はブラッシュアップと運営マニュアルやデモンストレーションなどのイベント準備に集中する想定だった。

しかし、私たちは全コンテンツに対して一切妥協するつもりがなかった。「やりたいことをすべて実現すれば、来場者は必ず楽しみながらカヤバを深く知ってくれる」——そう確信していた。

結果として、溢れる想いを漏らさず詰め込んだこ

とで、元々持っていた余裕をすべて食いつぶし、会期に向けて“余裕ゼロ”で進めることになった。

6.2 ラストスパート

9月後半、残りのやるべきことは明確で、あとは形にするだけだった。ただ、“形にするだけ”とは言え、慣れない作業の連続で非常に難しかった。どれも大苦戦したが、代表して4つ紹介する。

6.2.1 MOYORI

モビリティのモックアップを製作いただきつつ、フルアクティブサスペンションと四輪独立操舵アクチュエータに当たる部品の動きを干渉なく成立させる必要があった。それら部品を据えるため、シャシ設計、組立はカヤバ担当であり、未経験の中で非常に苦戦した。MOYORIシャシが組み立てられていく直前の様子を写真5に示す。

それ以上に苦戦したのが制御の最適化である。9月、10月で何度も300km離れたモックアップ製作会社を往復し、社内有識者にも度重なる協力を仰ぎながら調整を重ねた。会期に臨む準備が完了したのは10月23日だった。



写真5 MOYORIシャシ 組立直前

6.2.2 ミキサでボン

ミキサでボンは、ミキサ車の構造を来場者に正しく理解していただくため、可能な限り実機と同様の構造とした。主な変更点として、ガラボン機能を持たせる、動力源を人にする、構造理解を促進するためドラム部分を透明にする——これらの変更点を成立させることは想像以上に難しかった。

上記要件の達成と、コスト、納期、仕上がりの調整しやすさから、3Dプリンタと透明塩ビパネルを多用することにした。頭の中では問題なく仕上げられる想定でいた。

実際に貼り付け作業を行って気づいたが、接着に

失敗すると接着剤の汚れがこびり付き、ブレードの取り付け位置が1mmでも狂えばブレード間にすき間ができて見栄えが一気に悪化するなど、非常に繊細な作業の連続だった。

メイン動線から最も目に付く場所に設置するため、見栄えは一切妥協できない展示物である。細心の注意を払い、とにかく工数をかけて作業を進めるしかなかった。確認しながら慎重に作業を進めている様子を写真6に示す。

ブレードやホッパーなど3Dプリンタで製作する部品は約70点にも及んだ。それらの設計にも時間を要し、残り3週間でプリントからフレームへの貼り付けまで行う日程になった。カヤバ内の3Dプリンタを片っ端から融通いただき、関係者総出で、なんとか出荷当日の10月24日に完成させることができた。



写真6 ミキサでボン！ 製作途中

6.2.3 SA体感機

構造検討後、以前からお世話になっている地元企業のご協力もあり、9月末には稼働できる状態に持ち込めた比較的計画通り進行した展示物である。

しかし、自由落下による振動の収まり方違いでショックアブソーバの効果を体感する装置のため、乗客の体重や座る位置などによって、効果を感じ取れないという声があった。出荷直前までチューニングを繰り返し、最適仕様を模索し続けた。

6.2.4 正しく理解していただく、ということ

表現を間違えると来場者に正しく理解されない。JMSには老若男女問わず来場するため、誰しものが正しく理解できる表現を選んで各コンテンツを製作する必要があった。実施委員の多くは技術者であるため、誰にでも分かりやすく表現することに苦労した。

会期まで残り1か月を切ってもなお、デモンストレーション、動画、ブース掲示物は未完成。展示エ

リアと展示物の名称もまだ決め切れていなかった。残り時間に一切余裕はなくてもなお、実施委員全員が、来場者の視点に立ち、興味をそそる表現や、分かりやすい表現を模索した。クオラスの助言も得て、満足できるものを完成させた。

7 ドキドキのモビショー

絶体絶命の秋は一瞬で過ぎ、出荷日である10月24日を迎えた。会場まで破損せずに輸送できるのか、無事会期を乗り越えることができるのか——不安を抱えながら、準備してきた展示物を車両に載せた(写真7)。



写真7 展示物出荷準備

10月27日午前、いよいよ会場設営が始まった。始発の電車内でも「運送中に破損しないか」、「忘れ物やトラブルは起きないだろうか」と漠然と不安だった。しかし、出荷品すべて無事に、会場で待ち構えていた私たちの下に届いた。展示物は会場ですべて完成形となるが、これまでの緻密な計画と、施工業者の腕によって、設営はおおむね順調に進んだ。

設営後、各展示物の稼働確認を行った。しかし、鉄道体感機とMOYORIの2つがうまく稼働しないトラブルが発生。どちらもカヤバ自作の稼働を伴う展示だが、制御不能状態に陥っていた。社内有識者にも会場へ来ていただき、サポートを受け、試行錯誤を繰り返した。夜遅くまで作業を続け、ようやく改善の目途が立った頃、周囲のブースは既に静まり返っていた。

10月28日、各展示物のアテンドロールプレイングや、デモンストレーション、プレスブリーフィングのリハーサルを行った。デモンストレーション中のMOYORIは時折不安定な動きを見せたが、昨日よりは改善。万全とは言えない状態に不安を残しつつも、考え得る対策を施して会場を後にした。

設営期間中の様子を写真8～10に示す。



写真8 設営中盤



写真9 設営終盤

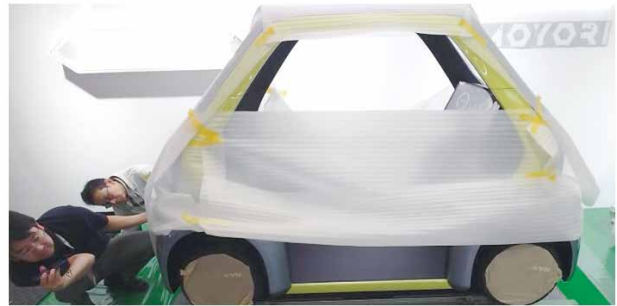


写真10 MOYORIの動きをチェックする実施委員と社内有識者

7.1 開幕

10月29日、JMS2025の開幕日である。西4ホールに足を踏み入れると、「カヤバのしわざ」と表示されたLED掲示板が遠くからでも映え、明るくポップなブースが目飛び込んできた。検討当初から描いていた“来場者を引き込むブース”が現実となった光景は感慨深かった。

この日はプレスデーで来場者は少なかったが、時間が経つにつれ、車両メーカーブースを後にした来場者が、次第に西4ホールへ流れてきた。他メーカーのブースとは一線を画し、カヤバブースは体感展示が大多数を占め、かつ、実施委員が各展示物のアテンドを行う体制である。前日のロールプレイングや運営マニュアルの作成・読み込みが功を奏し、慣れないアテンドながら大きなトラブルなく対応できてい

た(写真11)。業務での来場者も、体感を通じて笑顔になった——「楽しみながらカヤバの技術を知ってほしい」という当初の思いが実を結んだ。



写真11 会場風景（開場直後）

10月30日、カヤバはプレスブリーフィングを実施した。「はたして聴衆は集まるだろうか」と不安に感じていた時もあったが、MCの挨拶が始まると次第に人が集まり、出展委員長が登壇する頃にはブース外まで人だかりができていた。カヤバの歩みと未来への取り組みを多くの方に直接伝えることが出来、大成功を取めた(写真12)。

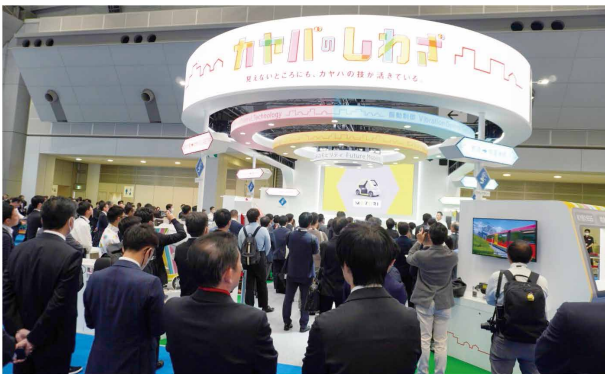


写真12 会場風景（プレスブリーフィング時）

10月31日午後からは一般公開、お子様から年配者まで多くの方がJMSに訪れる日々が始まった。カヤバブースはミキサでポンに30分待ちの行列ができたのを皮切りに、スタンプラリー対象の体感展示にも次第に行列ができてきた。クオラス側スタッフによる呼び込み効果も相まって、実施委員の想定をはるかに上回る大盛況ぶりだった。スタンプラリーをすべて周るため、カヤバブースに1時間以上滞在して下さる方も多く見受けられた。一方で、想定以上の反響により、カヤバグッズの準備数が不足し、急遽広報在庫の通常グッズを手配。更に、スタンプラリー台紙も数日で足りなくなることが判明し、会期中に再発注を行った。体感展示に加え、スタンプラリーの効果を実感する結果となった。一時的にスタンプ

ラリーを中断せざるを得ない場面もあり、その間に来場された方には申し訳なく思う。良い意味で想定外の状況が続く中、来場者に楽しんでいただくため、運営面では臨機応変な対応が求められた。会社に出勤しているアテンドシフト外の日も、遠隔で運営フォローに入るほどだった。

一方、ミキサでポンなど体感展示は、多くの方に体感いただくことで度々故障したが、実施委員の連携によりスムーズに復旧することができた。また、MOYORIの不安定な動きも、度重なる改善によって解消することができた。会期中ではあったが、展示物を万全な状態に維持管理する体制が整った。

その後もブースの勢いは衰えず、通常時は各体感展示に待機列が出来、デモンストレーションが始まれば大観衆が集まり、終了後には再び待機列に並ぶ——そんな流れが出来上がっていた。

混雑時の状況を写真13、デモンストレーション時の様子を写真14、スタンプラリー台紙を図8に示す。

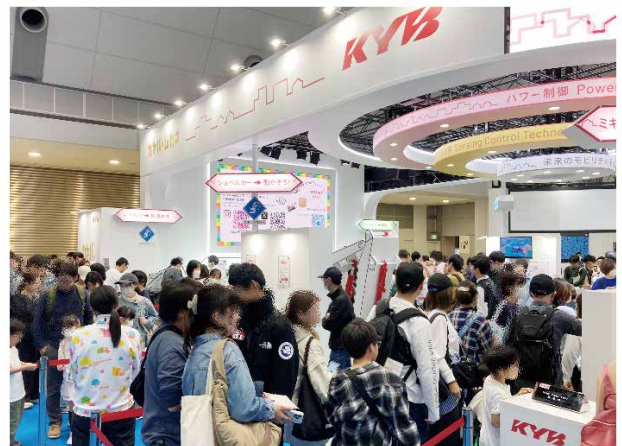


写真13 会場風景（大混雑時）



写真14 会場風景（デモンストレーション時）



図8 スタンプラリー台紙

7.2 達成感

会期中も非常に大変だったが、アテンドしながら非日常を楽しむことができた。普段、工場では見ることのない一般の方々が驚く表情や、お子様が目を輝かせながら体感している様子を何度も目の当たりにした。こだわって製作した衣装は、来場者や他ブースの方から「売ってないんですか?」と聞かれるほどの人気ぶりだった。会期終盤、トヨタ自動車株式会社 佐藤 恒治 社長(現 副会長 2026年4月1日付)と役員の方が突然ブースを訪れ、真摯に話を聞いてくださり、笑顔でブースを後にされたことも良い思い出となった。

全コンテンツの検討、製作に当たり、一切妥協をしなかったことで、日を追うごとに首が締まっていく準備期間だったが、これまでに積み重ねてきた苦勞が一気に報われた。全員で真面目過ぎるくらい真剣に取り組んだことは無駄ではなかった。全員で積み重ねてきたからこそ、ブレることなく、しっかりとカヤバをPRできたのだと確信している(写真15)。



写真15 会場風景(アテンドの様子9枚)

7.3 閉幕

11月9日18時、蛍の光と共に、12日間に及んだJMS2025は無事閉幕した。長いようであつという間の非日常だった。閉幕するや否や、実施委員と施工業者で解体作業を行った。8か月にわたり全力で準備してきたものが、たったの3時間でほとんど解体された。JMSの儂さを感じつつ、それと同時に安堵感も込み上げた。無事に終わることができた。これが何よりであった。動力源を伴う展示だったが、来場者のもとより、実施委員も含めて事故は絶対に許されない。構造検討時から安全面を最優先してきたからこそ、今があるのだと感じた。

7.4 評価

会期を終え、各種集計結果などを通して今回の出展を評価した。スタンプラリー台紙は約9,200枚配布、デモンストレーション観覧者は2,231名、ブースに来場した方は最低でも1万人以上と推測され、多くの方に「カヤバのしわざ」を体感いただくことができた。

ミキサでポンの体感に紐づくアンケート数は2,981件、残りの約1,800件はSNSフォロー人数である。前回よりも件数は落ちたが、今回はノベルティ配布を体感に紐づけたことが要因と考える。一方でアンケート者の質は向上しており、85%の方が展示物を見てからのアンケートである。カヤバの認知度は63%と、前回から13%減少した。今回はブースの印象に惹かれて来場した方が63%であり当初の狙い通



りカヤバを知らない方に多く足を運んでいただけたと考えられる。更に、好感度は86%と、ブース効果も相まって非常に高い値だった。カヤバへの就職意向（学生）については、43%が働きたいと回答。どちらでもない49%と、約半数の学生に働きたいと感じていただけた。アンケート自由記述414件には、「大人も子供も楽しめるブース」、「体験型で楽しく学べた」、「見せ方がうまい」、「可愛いブース」など好印象なものに加え、カヤバに対する応援の言葉も多くいただくことができた。また、アテンド中には「こんなに色々な製品を扱っているんですね」、「とても分かりやすい」と感心のコメントを何度もいただいた。なお、待ち時間が長いという意見は数件いただいてしまった。来場者を極力お待たせしない運営を心掛けてはいたが、ブース全体で更なる工夫が必要だった。

これらを総括し、出展目的をきっちり果たすことができたと考えている。

8 おわりに

今回のカヤバブース出展に当たり、数々の壁に直面しました。多くの方々のご支援、ご協力がなければ、大成功で終えることはできませんでした（写真16、図9）。

キックオフからあらゆる面で先導いただいたオラスの皆様、溢れる想いを詰め込んだ展示物やブースを製作いただいた会社様、事業の垣根を越えて力を貸して下さったALLカヤバの皆様、適切な助言をくださった推進委員と出展委員長、そして数々の壁に直面しても付いて来てくださった実施委員と事務局の皆様——関係したすべての方々に、心から深く感謝申し上げます。

また、展示物輸送で大変お世話になりました興亜組 溝口様のご逝去に際し、この場を借りて謹んで哀悼の意を表します。

著者



佐藤 洋輝

2010年入社。
オートモーティブ
コンポーネンツ事業本部
技術統轄部 開発センター
開発実験室



栗原 健太

2015年入社。
オートモーティブ
コンポーネンツ事業本部
サスペンション事業部
技術部 第四設計室

最後に、JMS2025の実施委員リーダーを通して、「意思」を持つことの大切さを改めて学びました。意思を持って接し、会話を重ねたことで、普段関わりのない方との協力関係を築き上げ、その結果、ひとつの大きな目的を達成できたのだと思います。今回のように、ALLカヤバで共に協力し、創意工夫しながらベストを尽くすことで、創立100周年に向け、会社全体が更に成長していくと確信しております。

今回の活動と関係者の皆様が、その起爆剤となることを心から願っています。



写真16 会期終了後カヤ「バ」で集合写真撮影



図9 JMS2025カヤバブース特設サイトQRコード

追伸、次回以降のJMS出展委員へも、温かいご支援、ご協力をいただけますと幸いです。